



MERI Japan名称の由来・シンボルマークについて

“MERI”はアメリカ・メンフィスにある献体を用いた医療技術トレーニングや機器開発を行う施設”MERI (Medical Education & Research Institute)”より名づけられました。MERIでは献体をしようすることにより、患者にリスクを負わせることなく、外科医の卒後教育や最新医療技術・機器の研究・開発が行われており、アメリカだけでなく、日本を含む世界各地の外科医や医療関係者が医療技術トレーニングを受けるために訪れています。

シンボルマークは医学のシンボルである「アスクレピオスの杖」をモチーフに、滋養・慈愛に満ちた深い海をイメージした「ミネラルブルー」という色を使ってつくられました。



医学トリビア

医学に関するちょっとした豆知識

アスクレピオスの杖って？

ギリシャ神話に登場するアスクレピオスは、オリンポスの神アポロンの息子のひとりです。森の中で育った彼は、蛇により薬草の効用を教えられ、その後医学を修得し、ついには死者を生き返らせることができるようになります。

多くの死者を生き返らせた彼は「秩序に反する」とゼウスに殺されてしまいますが、医師としての功績をたたえられ、神の一員となり、へびつかい座となりました。

薬効を蛇に教えられたアスクレピオスは、杖に蛇を巻きつけていつも持ち歩いていた。アスクレピオスの杖は医学をあらわすシンボルとなり、病院、製薬会社など医療関係の仕事のマークとして多く使用されています。



世界保健機関(WHO)のシンボルマークにも、アスクレピオスの杖は使われています。



メディア掲載

活動が採り上げられた記事等をご紹介します

7月11日の市民フォーラム開催に関連して、後援をいただいた中日新聞に、6月30日、7月2日の2回ほど記事が掲載されました。

7月2日掲載→



←6月30日掲載

活動報告 ー編集後記にかえて

● 10月25日(日)13:30～、神奈川県鎌倉市の円覚寺で開催される、第15回日本最小侵襲整形外科学会主催のサテライト市民フォーラム「自分と家族、どのような“おくりびと”になりますか？」を後援いたします。

基調講演は、円覚寺派管長 足立大進老師によるお話、パネルディスカッションには、湘南鎌倉人工関節センターの平川和男先生、尊厳ある死と葬送の実現をめざしたNPO法人エンディングセンターの理事長である井上治代先生、葬祭ディレクターの芝崎成光さんなどを迎えて、死を悼(いた)む事と先端医療への貢献の調和についての討論が行われます。

秋深い古都鎌倉で、生命の重さ、尊厳ある最期についてみなさまと一緒に考えていきたいと思います。

● 献体を用いた医療技術トレーニングの実施に向けて、厚生労働省の科学研究費補助を受けた「サージカル・トレーニングの在り方に関する研究班」にて、現在いろいろな調査が続けられています。

整形外科をはじめとし、産婦人科、脳神経外科、耳鼻咽喉科、消化器科など多くの外科分野で献体を用いたトレーニングの有用性が挙げられています。多くの外科医が必要とされていることが、今までなぜ日本で行われてこなかったのか。そこには法律、日本人の価値観など、複雑なさまざまな問題があるように思います。

このニュースレターを通じて、医師のトレーニングのこと、献体について、献体をめぐる法律についてなど、いろいろな方からの情報提供を基に、できるだけわかりやすく、みなさまに伝えていきたいと考えています。今後ともよろしくお願いします。



MERI Japan

メリジャパンニュース Vol.1 No.1

2009年10月15日発行

安全・安心な医療技術を受けるために必要なこと

ー 医師の医療技術トレーニングについて考えてみませんか？

ニュースレター発行について

NPO法人MERI Japan(メリジャパン)は、2007年1月に献体を用いた医療技術トレーニングを、日本で実施するための設備づくりを行うために発足しました。

現在のところ、主催市民フォーラムを名古屋市で2回、札幌医科大学との共催での市民フォーラムを1回開催し、献体について、最先端医療技術について、医師の医療技術トレーニングの現状と献体を用いた医療技術トレーニングの必要性について、一般市民のみなさまと一緒に考えてまいりました。

最先端医療技術は日々進歩しています。自分が手術を受けなくてはならなくなったときに、安全、安心な治療を受けたいと誰もが思うことでしょう。テレビや雑誌ではスーパードクターと呼ばれる医師たちが連日のように採り上げられています。しかし、スーパードクターと呼ばれる先生でもはじめから最先端の医療技術を習得しているわけではありません。ではいったい、医師たちはどのように手術の訓練を行っているのでしょうか。

マスコミやインターネットによって多くの情報が入る時代です。情報にふりまわされるのではなく、上手に利用して、自分に行われる治療について、医師まかせにするのではなく、わたしたち自身がよく考え、選択することが重要なのではないのでしょうか。

この活動が、わたしたちが受ける医療について、より深く考えていただくきっかけのひとつとなれば幸いです。

安全・安心な医療技術を受けるために、必要なこと、これから考えていかなければならないことに目を向けてみませんか？



特定非営利活動法人メリジャパン

理事長：蜂谷 裕道

所在地：愛知県名古屋市

会員数：個人会員 18名

法人会員 1法人

NPO設立認証年月日：2007年1月19日

設立目的：

- ・最新の医療に関する情報などを医療消費者に提供し、望ましい医療・安全で安心な医療について考える機会を同時に提供する。
- ・cadaver(献体)を使用時のサージカル・トレーニングを行うことのできる枠組みおよび施設の実現を目指す。
- ・献体を使用時の医療技術及び機器の研究・開発・検証を行うことの出来る施設の実現を目指す。
- ・その他、医療におけるさまざまな問題点について、社会への具体的な提案を行い、質の高い安全な医療の発展に寄与する。

もくじ

ニュースレター発行について	1
メリジャパン発足のきっかけ	2
市民フォーラム開催しました	3
医学トリビア、メディア掲載	4
編集後記	

私は整形外科医として、日々患者さんの治療にあたっています。人工関節置換術や内視鏡による椎間板ヘルニアの摘出術など、昨年は1年間で300件の手術を行ってきました。私が医師になってから25年が経過しましたが、医療技術は日進月歩の勢いで進展していくので、新たな手術手技を習得するのも大変です。

私を含め外科医がどのように手術手技を学んでいるか。この実際をご存知の方は一般の方ではなかなかいらっしゃらないと思います。「神の手」「スーパードクター」呼ばれる外科医のテレビ番組を最近をよく見かけますが、そこでも放送されるのは実際の熟達した手術の様子ばかりです。熟達した手術を行う外科医も、はじめからその手術がスムーズに行えたわけではありません。では、日本では外科医はどのように手術手技を学んでいるのでしょうか。

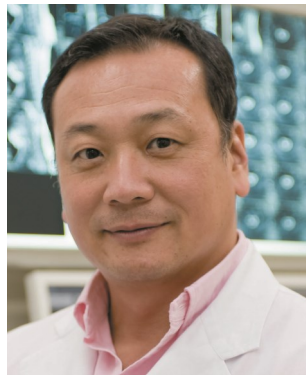
学生時代に医学部で、手術の勉強をするのだらうと思っていらっしゃる方も多いと思いますが、実は医学生時代には、ほとんど手術手技について教わることはありません。卒業後、医師として働き出してから、先輩の医師の手術現場に立会い、何度か見学し、その後先輩の手ほどきを受けながら手術手技について学んでいきます。最近は精巧にできている模型やシミュレータも多いですから、そのような器具を用いることや、場合によっては豚などの動物を用いて手術トレーニングを行うこともあります。

しかし最近の手術は患者さんの身体にかかる負担をなるべく少なくするため、傷口を小さくして、内視鏡などを用いて行う「低侵襲(MIS)」のものが増えています。当院でも人工関節置換術や脊椎固定術にMISを導入しています。そうすると、以前だと傷口が大きいためにはっきり見えていた術野が見えにくくなるし、MIS用の特殊な器械も増えてくるため、高度な技術が必要になってくるのです。模型などはあくまでも「つくりもの」ですから、筋肉、血管などを触った感覚も違いますし、今までのトレーニング方法では手技を習得するのが難しい場合もあるのです。そこで、私を含め、外科医の中には海外へ行き、献体を用いた医療技術トレーニングを受けている場合があります。献体とは自らの意志で死後、遺体を無条件、無報酬で大学へ寄贈し、医学教育に役立ててもらうものです。日本でも21万人の方々方が献体登録をされているといわれています。しかし、なぜ献体を用いた医療技術トレーニングを受けるためにわざわざ海外へ行かなくてはならないのでしょうか？



日本では、法律によって、献体されたご遺体は医学部の解剖学教室で、医学生が解剖の知識を学ぶために使用するに限られています。つまり、私のような医学部を卒業した外科医が、手術手技を習得するためにご遺体を使わせていただくということは、今の日本では許可されていないことなのです。欧米だけでなく、最近では韓国、タイなど近隣諸国にも献体を用いることのできる医療技術トレーニングセンターが設立されています。なるべく近い国にトレーニングに行くといっても、何日か手術や診察を休んで、患者さんに迷惑をかけなくてはならない。どうして海外でできていることが日本ではできないのか。日本にいる患者さんに行う手術のトレーニングをなぜ海外に頼らなければならないのか。このままでは日本の医療は海外に遅れていってしまう。何度か海外にトレーニングに向かうたびに、その疑問は強くなりました。そして、同じ意見を持つ医師や、一般の方々のご協力のもと、2006年にメリジャパンを設立し、2007年1月にNPO法人の認可を取得したのです。

蜂谷 裕道(はちや ゆうどう): 整形外科医、NPO法人メリジャパン理事長。愛知県名古屋市出身。整形外科専門医として、低侵襲での 膝・股関節再建術、内視鏡下での脊椎手術を数多く行っている。



市民フォーラムを開催しました

7月11日(土)に、名古屋市の中電ホールにて、市民フォーラム「先端医療技術を安心して受けるために - 献体を用いた医療技術トレーニングの必要性と今後の課題 -」を開催し、約170名のみなさまにお集まりいただきました。

基調講演では、東京大学法学部教授の樋口 範雄先生に、「人体試料に関わる法律と問題点」についてお話いただきました。樋口先生からは、「献体を用いた医療技術トレーニングを行ってよいという法律がないから実行できない、というのはおかしい。発想の転換をして、いいことであるなら実行し、実行する中で本当に問題があることを禁止する法律を作るべきではないのか。」という今の日本の法律全体にも関わる面での指摘をいただきました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、現在外科医が受けているトレーニングの状況や、献体を用いた医療技術トレーニングを可能にするために、医学会にて現在行われている取り組みや、この問題を多くの方々に考えていただくにはどうすればよいのか、等についてさまざまな意見が出されました。

いただいたアンケートによると、「献体が医師の医療技術トレーニングに用いられていないという現状を今まで知らなかった」という方が6割を占めました。フォーラムに参加して、「医療技術に活かされるのであれば献体したい」という考えを持った方が5割近くいらっしゃいました。下記にフォーラムの様子をご紹介します。



樋口先生は、インターネット回線を使用した遠隔講演にご参加いただきました。

向かって左から:

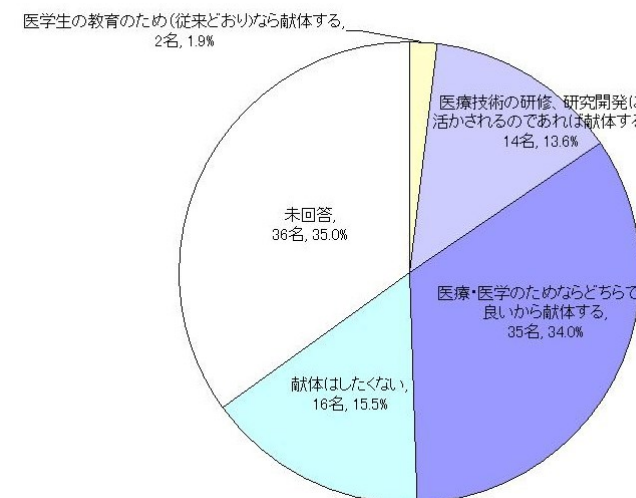
コーディネーター 有江 活子さん
中日新聞 安藤 明夫さん
参議院議員 大塚 耕平さん
北海道大学医学部腫瘍外科 七戸 俊明先生
MERI Japan理事長 蜂谷 裕道



みなさまからのご意見・ご感想



質問: ご自身の献体を考えますか？



- 新しい医療については、本国は後進国であるようで驚きました。(50代男性)
- 各方面の第一人者がパネリストとして参加しており、いろいろな見方や考え方がわかってよかった。(30代女性)
- ルールづくりの発想の転換の必要性。大事なことに気づかせていただきました。(60代女性)
- 改めて献体を前向きに考えたいと思った。(60代女性)
- 他界した兄が献体したので漠然と医療に貢献する行為であると認識していた。しかし、医学生教育のために限られている現状を本日理解できました。法律的にも見直し整備が必要だと思う。私も医療研修・研究開発のためなら、献体について考えてみたい。(70代男性)

たくさんのご意見、本当にありがとうございました。今後の活動の参考にさせていただきます。